

栗生の方言（二） さ之部～と之部

山崎, 時造
鹿児島大学教養部助教授

崎村, 弘文
鹿児島大学教養部助教授

<https://doi.org/10.15017/10394>

出版情報 : 文献探究. 27, pp.31-48, 1991-03-31. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

栗生の方言

言 (二)

さ之部
と之部

山崎村 時造 弘文 著
監修

さ之部

さいかくもん 才覚者。

さいく 歩きまわる。さるく。

さいこん 藁たたき。わらうち槌。

さいづつ さいづち。細工用の木槌。

さいもん 祭文。浪曲の前身。講釈。「ーかたい」祭文談り。

さえんばたけ 菜園島。人家の近くにある野菜島。そのばたけ(園島)。

さお けんざお(間竿)。「ーいれ」測量、丈量。又きせるのらう。

さかしい 栄しい。健康。達者。

さがなか さがない。よからぬこと。

さかみづ 暴風など下雨を吹き上げて屋根漏りすること。 ぼお

さかむけー 坂迎え。旅から帰って来た人を迎えるためのご馳走。

昔は京の人が伊勢参宮からの帰りを逢坂山で出迎えたことから坂迎えの語が出来たが方言では坂迎えの馳走をいい又湯泊などに

行っている人を慰問して馳走品を上げることを「さかむけーにい

く」という。

さかもい さかもり(酒盛)。

さきおとてー 一昨々日。

さきおととし 一昨昨年。

さきせん 先々から順々に。到着順。

さぎつちよう 左義長。古昔朝廷では正月十五日清涼殿の東庭に青

竹を束ねて立てその上に扇子、短冊又は主上の古書を結び付け陰

陽師が秘い祈りをして詠いはやし正月の飾り物などを取り重ねて

焼き悪魔払いをする行事があった。主上も【ぼウ】お出ましにな

って観覧された。この青竹の束は三本の義長に結び付けたので「

さぎちよう」と称え左義長と宛字する。この左義長の火であぶつ

た餅を食べると瘡病を払うという。義長比喩のは古昔朝廷や貴

族では今のゴルフに似た義長の遊技があった。木製の丸い玉をク

ラブに比すべき義長という糸糸で美しく飾った木の槌で叩くので

ある。この槌を義長と呼んだ。この義長が変遷して「ぎつちよう

」という遊びに至ったのである。今時屋久島に藩制時代から正月

七日に長大な青竹の束を三本の松の柱にゆわえて左義長の行事を

する。栗生では特に長大なものを立て海浜で行う。「どーんどや

」の条を参照。

さーぎつちよう 左義長。

さきやま 立木を伐採する作業。又陸地。「ーつかせる」陸地又は

岩礁に舟を乗り上げる。

さくい しゃくり。材を中凹にえぐり取ること。

さくら 鱸の稚魚を「せーご」や「や長じたもの」を「さくら」更に長

【ぼウ】じたものを「すすき」という。

さくる さくいをすること。しゃくる。

さげる 下げる。吊るす。

さごし 珊瑚枝。さんご。

さこんたろう 原始的な米つき水車。

さーさー げらげら。「ーわろう」げらげらわらう。

さらさら 枝のついた小さい竹。「―だけ」。「―さっぱい」さらば

さっぱい。少しも残さずごとく。

さし 差し金。曲尺。又さし棒。天秤棒。

さしか 久しか。久しい。

さしがね 曲尺。又入れ知恵。

さしげた 高下駄。

さしつき 一番初めに。

さしつけ さしつき。

さしつくぢい つつついていぢめる。

さしふた 入札。

さす さつ（紙幣）。又やぶじらみ。実が熟すれば衣類や獣皮な

どにつきて種子を播布する植物。

さだ さんま。

さだち にわか雨。

さつくい さくり。大きく割れること。

さつさわい さしさわり。

さっぱい さっぱり。

さっぱい さっぱい。

さつちむね 粗暴な。粗暴な。水のとばちりや水に濡れちな

どを振つてとばちりをかけること。

さても 意外に思ふときの発声。

さねはなれ 実離れ。暴風のため樹幹が極度に屈曲することによつ

て木理が裂けること。又桃の夾の果肉と種とがよく離れるもの。

さばく 髪をとき梳くこと。「さばきぐし」髪を解くに用いる齒の

あらい櫛。

さばくい 手順。「―がわるか」。いきさつ。「こげん」があんも

んか「こんな事の次第があるものか。又仕わざ。―て」仕業を

する人。

さばけた てきばきした。

さばさば 何のかわり合いもなくさっぱりするさま。

さふん しゃぼん。石鹸。

―さーめー…さまに。「しー」したものの。又なり。「よこー」

よこさまに。

さめく ぞめく。集つて騒ぐこと。「とひいおがー」とひうおが水

面に群遊して「ザー」と音立てること。

さら 膝小僧。

さらいたし さらけたし。又屋根漏りのひどいこと。

さらばさっぱいはいてらんまえ 寺の庭は広く平坦で何の障害物もなく

さっぱりしてある。今迄の係わり合いが全部無くなってさっぱり

なったこと。

さるく 歩き廻る。さいく。

さわい さわり（障）。忌みもの。又たたり（祟）。魔性のたたり。

又さわい（三割）。十分の三。又もすりん。「きんー」。「ほん

ー」純もすりん。「しんー」新さわい。がす織り又混紡もすりん。

さんぐわん だーすと殆んど見かけの付かぬ魚。骨に青味がある。

さんげた 棧下駄。竹の棒を用いる竹馬。

さんごじゅうはち 三五十八。三五十五も長いのにそれよりも更に

長ひくこと。

さんごじゅうろく 三五十六。三五十五よりも更に時間がかかるこ

と。

さんじつ さんじゅつ（算術）。

さんずんくぎ 曲尺で三寸ばかりの釘。金沢辞林には三寸釘長さ一

寸ばかり五寸釘長さ二寸五分ばかりとあるも屋久島では通用しな

い。

さんてんぼら 三年鰻。一尺近くもある大きなぼら。とど。

さんば さらば。手を振りバイバイすること。「ーさんば」幼児の語。

さんばしやう さんばやう(三番叟)。

ざんぶざんぶ ざぶざぶ。勢よく川を徒渉すること。

さんめー 三百代言。

し之部

しー 尿。小児に小便をさせるときの発声。「しし」。「しっこ」。

しい しろ(尻)。「ーくち」あとさき。「ーきれうぢ」うじ。「ーたぶら」しりたぶら。臀部。「ーつばい」しりからげ。「ーたれ」弱虫。「ーはあめ」尻は雨。予後不良のこと。

しいくわ すいくわ。西瓜。

しいら しいな(糞)。又弱い者。「バー」役に立たない弱虫。

しうえー 淨海水。七五三の波を打たせて海水をひしゃくで汲み神事に供する潮水。これを笹の葉等で四方にまきて清めをする。「ーをふる」。

しえん 紙鳶。たこ。

しおいい 潮入り。大潮のときには潮の入るほどの低地になったところ。又入り江。

しおくい 潮くり。潮播き。竹を割って「さじ」のように作り長い柄をつけて鰹の釣れ口の悪いとき海水を播きあたかも小魚が波頭に跳ねるように見せるもの。又しおくり(仕送)。

しおさき 満ち来る潮の先端。

しおたれ 塩物が湿気を引いて水滴をなすこと。又見すばらしい格好をしておるさま。

しおみる 潮満つる。満潮。「しおみい」。

しおめ 潮合い。

しおんからか しおからい。

しかしか ろくろく。「ーむなか」ろくてもない。

じき 間違い。「ーいうがよー」そのようにいうけれどそれは間違ではないか。「ーじき」笑うにたえたこと。

しきたい しまたり。

しきび しまみ(襦・柵)。

しぎれ 手首などが肥えてくくりしめたようになったもの。

じくじく めひる木。又水気が多く柔ら過ぎたこと。又それを棒などて続けさまに突くときの音。

しこ 分量。「ーが多か」分量が多い。「よかー」よい程、相当に。

「ーぐれ」これ程位。

じこう 利口。「ーなことをいう」自分に都合のよいことを上手にいう。又器用。「ーもん」器用な人。

じごく 地獄。穴に石をのせて水溜りせぬように作った水溜め。

しごむ しゃがむ。

しし しか(鹿)。

しーしー 精を出。「ー心に仕事をするときに発する語。又小児に小便させるときにいう語。

じし 利子。

じじつ 手術。

しーじんどん 水神様。旧暦五月十六日が水神祭りである。香食の鼻高団子を供えきやうりを犠牲として川に流し子供を水から守るための儀式。

した 重量物などを運ぶとき下に敷いてすべりよくするもの。すら。

したおーび 下帯(褌)。

したくれー 下かけになってあるもの。下葉。

じたじた ひどい湿地。湿田(マツ)。

したす 美装する。

したーぢ したち(下地)。汁。又本来の性質。

したどい 下腹(したどり)。手下、敗者。下腹とは思んで妻を訪

ることで恥を忍んで屈することすなわち「しのぶ」意味で手下、

敗者に用いる。下風に立つ。

したむし やもり。

したらく 墮落。行状のしまりのないもの。だらしないもの。又自

分勝手なこと。

しちりん 七輪。かんてき。又たりない人。一銭に足りない七厘。

しちん しゅちん(橋珍)(縹珍)。帯地や羽織の裏地などに用い

る厚地の絹織物。しっちん。

しっかい しっかり。「ーもん」しっかり者。

しっくしっく しっくしっくと泣くこと。

じっくじっく 水気が多く柔らか過ぎたさま。又それを棒などで続け

さまに突くときの音。

しっこつこー 肩車。

じつたい 湿帯。ぬかるみ。又どろあそび。

じづめ 理詰め。理屈でおすこと。

しでー したい(次オ)。

しとみ 板又は苦などで船の舳又は船側を包み水のはいるのを防ぐ

もの。節(しとみ)は朝鮮語で苦のこと。

しなだれ しなびて垂れ下がること。弱々しく寄りかかること。

しなもん 品物。

しねー 執念。「ーのつよか」執念深い。意地っぱり。又しない(

竹刀)。

しねーぶ 島地路傍などに自生するもの。夏日黄色の細花をつける。

開花前のもは食用となる。醋のもの又はぬたに適する。

しのこま 簀子間。すのこの下。床下(ゆかした)。

しのわり しのわり(篠割)(笹割)。互いに相手の矢を射【49ウ

】割る競技。

しげつけ 芝を束ねて水底に沈めおき「うなぎ」などをとる漁法。

ふしつけ。

しばどい 四番鶏。夜明けを告げる鶏鳴。

しべしで。注連(しめ)。又は玉串などに垂れ下げるもの。又玉

串。

しばむ すばむ。

しまかた 島方、地方の対。島の方。又島の人。

しまく 風巻く。荒い風が吹くこと。又夜着やふとんなどを押しま

くってあはれること。

しまたぐい 島たぐり。島伝い。

しまづてー 島伝い。

じみ 燈心。

しめーだす 外出の身仕度を調える。又旅仕度をする。

しも 霜も水も「しも」という。「ーがね」歳末に押し追った頃の

金銭。普たんの時よりも更に大切な時季の金銭。

しもと よしもと又きしもと。共に吉元に作るは誤りなり。葦元又

岸元が正しい。なお「きしもと」を参照せよ。

じやー さようか。ほんとか。

しゃく 長さ。「ーがたらん」長さが足りない。「ーがみ」一尺以

上。「ーじめ」材積を算出するための直径を計ること。

しゃーく ひしゃく。又酌。「ーとい」酌とリ。又尺。又しゃく(

癩)。

しゃさつちえ 明々後日。やなさつて。

しゃちばい しゃちこばり。上体を後へやらせること。又硬直。

しゃつくい しゃくり(吃逆)。

しゃみせん さみせん。

じやりん じよれん。

しやわせ しあわせ。幸。又出来上りのよいこと。

じやん りやん(両の唐音)。(六の唐音りゆう)。

じゆう りよう(漁)。「ーとう」漁頭、漁の上手な人。「ーごー

さま」竜王様、海神。

しゆうか すいくわ(西瓜)。

しゆうきーがいわわけ 周吉が魚分け、手取りが少いこと。周吉と

いう少年がいた。或る日塚崎に行くとい他の少年達三人が一尺はか

りの魚を捕えた。これを見た周吉は一生懸命にかけて行き「おい

が持ってくれ」と強いてその魚を持って皆と帰った。周吉は自

分の家へ持って行き自ら包丁を取って魚を切り分配をした。「こ

れは包丁のこい」「これは俎のこい」「これは桶のこい」「これ

は切の方のこい」四人前をその方へ取り人間は三少年と自分と四

人であるから結局少年達は各々1/4ずつの分配を受けたに過ぎない。

直接魚を捕えた本人達はかくしてその手取りは至極僅少なものと

なった。

しゆうた すふた。円座の中央を空にしたものに似たもの(丸形と

長方形とある)。「かいのお」又は「といさん」で物を背負うと

き背中当てるもの。「へわ」よりは薄くてきてある。

しゆうだ がてんのいかないこと。不思議に思われること。「ーも

んで」おかしなもの下。

しゆうたれ いくじなし。

しゆうと しゆうとめ(姑)。「ーんぼ」姑にあたる老母。

じゆうてー 踊りの折りの謠い手。

じゆうら っら。「よこー」よこづら。「みみー」耳のあたりの横

つら。みづら。

じゆくじゆく 水気が多くやわらかいこと。又めひるぎ。

じゆくじん 琉球人。「ーこうげー」琉球符。果実が符に似て琉球

に多く産するのでいう。めひるぎ。じゆくじゆく。

じゆんとう 順当。案理の正しいこと。「そいがーじゃ」。

しよいがけ けしかけ。

しよしい しょうゆ(醤油)。

じよしい ざうり。

しよがおろし わさびおろし。

しようから 塩辛。

じようき 蒸気船。

しようく しょく(卓)。つくえ。

しようれ 笑止。気の毒。

しようじ 精進。忌服のとき生臭ものを食わぬこと。「ーあげ」忌

明けて精進料理から開放され普通食になること。精進あげには特

に生臭ものを食べる。「ーんまーい」精進食のみ食べること。

しようじきんでー 正直台。かんなを押すときに用いる台。又桶屋

がくれ(樽)を削る鉋を仕込んだ大きな平面台。

しようじゆく 生熟。身心共に一人前になること。又思春期に達す

ること。

じようじゆう 常住。いつも。常に。「ーさんぼう」しようちゆう。

じようじゆき 常住着。ふたん着。

じようじようしゆう 掟茶集。諸般の掟(おきて)を集録したもの。

しようつき 祥月命日。

しようてーもち 世帯持ち。世帯ぶりの上手な人。

しよとうもん 正当者。正直で信頼できる人。

しようふ 生麩で作ったのり。又小麦粉を煮て作った糊。

しようぶ しようぶ草。カ草。

しようべんしかぶい 小便たれ。

じょうまつ 上松印。灯油の最良のもの。又リゆうまちす。

しようよう ちそう。もてなし。 52オ

しようよう 精霊。「ーどん」精霊様。「ーだな」精霊棚。精霊様

を迎えて祭る棚。お盆に先祖の諸霊が来られる庭前に迎え火をた

き帚木で椽の先きについた四角形の棚に迎え入れ特製の「しよう

よどん」のごき(小さい)が五十椀取り揃えた黒漆の塗り椀(わん)に色

々の精進料理ややめんなどを供え燈明をあげ又灯籠をともして壺

を慰める。又着はよもぎ、いちびなどの軽いものを早燂(はや)したものを

を用いる。この棚は十六日の朝川に流した。一種の精霊流しであ

るが精霊棚は真宗の家では作らない。又十五日の夜には墓に送り

火をたくがこれも真宗では行なわない。

しようれー 性来。性質。

しようれーながし 盆の十五日の夜灯籠を川や海に流し精霊を送る

儀式。 52ウ

じょうろう 丈量。測量。

しよせいご 私生児。

しよせいらんぽー 書生らんぶ。机上に据えて書を読むに用いるら

んぶ。

しよたれ みすぼらしい姿。よれよれの着物。よごれたなり。

しよのみ そねみ。

しよぼしよぼ 雨のそぼ降るさま。又火のほのかに燃えるさま。

じよろい 淨瑠璃。

しよんがつ 正月。

しよんがーぶし 昌巖節。出水の地頭山田昌巖が菓出し奨励したと

いう民謡。

しよんぼしよんぼ しばしよぼ。

しらすーぎ 白鷺。

しーらしーら 熱湯の煮え立つさま。

しーらへえ 梅雨が明けて白い入道雲が出て降雨のない前西風。

しーらへー 白灰。

しーらむし 白蟻。

しーるごーき 汁碗。

じーかーき 自在鉋(き)。

しーろ 代。「ーかーき」代掻き。水田の整地。

じーろ 地爐。いろり。「ーかーき」じろかき。いろりを掻きならす

具。

じん 台陣。「ー」にのせる。造船のとき又船を修理したりたせたり

するとき或は木挽が材をわくときなど台にのせること。又りん(ママ)

鈴の唐音りん。胡銅器(さはり)で造る銅器。仏事に用い又合

図に用いる。 53ウ

しんぎく しんぎく。春菊。

しんけい すぐにかつとなる人。

しんしやく 辛酌(しん)。気の毒に思うこと。

しんそう しそう(しん)。紫蘇。

じんたく じゅんたく(潤沢)。

しんちげー 尻番い。「とんぼ」が交尾して雌雄互に尾を銜み合

輪になって飛ぶさま。どなめ。又犬などが交尾してつがえたまま

離れずにあるさま。

しんどうか しんど。労れた。

しんぼ しっぽ(尻尾)。

す之部 54オ

すい すり(摺)。「ーよる」にじりよる、すりよる。又吸い。 54オ

「つけ」吸い着ける。「煙草を「つける」。
すい 船の上板の上部につけた材。船鈔・舷。「「なみ」船べ
り」水に浸るまで満載したこと。
すいきき すりこぎ。「あしが「い」なつた」諸方をかけぶり廻つて
足が搗粉木のように搗り切れた。

すえすえ 涼え涼え。そこはかとなく涼しいこと。

すかす すきまをつくること。「あれえ」洗い流して土などをな
くする。【54ウ】「ほい」振りますかす。壊つてうつろになす。
又間をあける。物と物との間隔をとる。

すきうつし 透き寫し。字又は絵の上に紙をのせ透して寫し書ま
すこと。

すきがき すきうつし。
すきみ かいまみること。物のすきまからのぞき見ること。

すぐる 祈禱師が病人についたつきものをすぐり払うこと。
すげ すが。「「がさ」菅笠。

すごき しごき帯。
すごめ めじろ。はなすい。

すず 錫で作った徳利。お神酒を入れるもの。又并当箱に設けた四
角形の錫製酒入れ。又八重缶に生えである笹竹(篤)。やくしま

【55オ】すず。
すずいぶた 硯蓋。祝儀のとき口取者などを飾り盛る広蓋。又その

取肴。又洲決台と硯蓋とを併せて「すずいぶた」という。すはま
台はその形洲決のように凹凸のある縁の付いた台で雲形の足をつ

けたもの。盤上に菓子肴みかんその他のもので築庭や泉川などの
景をつくり硯蓋と共に席上に飾るもの。

すずき ニ三寸位までの稚魚を「せーご」稍々長じて五寸位までを
「さくら」長じたものを「すずき」(鱸)という。

すずさーれー 筋さらえ。毛筋棒。髪ゆいに用いる柄の長い櫛。
すすとい すすはらい。
すずむ しづむ(沈)。

すずめ 幼児や少女の髪を剃るとき前髪やえり髪又みづらなどに毛
を残したもの。すずしろ(髻)。又屋久島の雀は「おたすずめ」
という。屋久島には元元雀はいなかった。明治三十何年の頃指

宿の人で粟生に来て長く居た小田与次郎という者郷里指宿地方の
ら雀を一番持ち来り籠飼していたのを放ちそれが忽ち繁殖して
小田雀の名を与えられた。

すずもーる しづむ(沈)。
すずれ おてだま(お手玉)。

すずれ すべりおちること。又こたれ(木垂)。枝がたわわになる
こと。

すぞくませ ふき(枕)。
すた した(台)。

すだい すたれ。普通竹を編んだもの。風雨を防ぐために椽の外側
に設ける。

すつくすつく ちくちく痛むこと。
すつたい すつかりつかれる。

すつたすつた すたすた。又滴の調子よくたれるさま。
すつたすつた すたすた。

すつたもつた ものちやく、ことがもつれるさま。
すつてつぼう 遊技用の手製の鉄砲。うら込めの玉を火薬を用いて

発射するもの。素鉄砲。
すつばい すべて。全部。

すつばすつば すばすば。煙草をうまそうに吸うさま。
すつぱいとつぱり。満足するまで充分に。「「いれる」。

56オ

ずつぷずつぷ 船々が沈むばかりに積荷したさま。

すっぽん 腰差し煙草入れの煙管入れの中の蓋を抜くとき「ぽん」と音がするもの。

すなはち すなわち。屋久島では「すなはち」と発音する。「すなわち」とは発音しない。

すねーた 簀の板。船の敷板。「およぎ」簀板に乗って泳ぐこと。すねぶと 脛太。ヒラリア。

すばてん おしゃべり。
すばやか すばやいこと。
すぶく うずく。

すべー すばえ、さし(罌子)。酒醋まじなどにたかれる小さい虫。又船の「あおい」につける縁木。

すぼ から、もみがら。又短かいもの。「まら」。
すぼた めじか。そうだがつお。

すぼつけ 前後の思慮なく意に従って行動する匹夫の勇にはやるものを「ぼつけ」という。その一段上の者が「」である。

すまし 清し汁。吸物の醤油又は塩でこさえたもの。
すまーる すばる星(昂)。

すみ すみひき。「」をする。材に墨引きをすること。
すみかね 規矩。標準となるもの。あてになるもの。「」をあてる

すんぬけ すぬけ(素抜)。「」がら「すぬけした残骸。「いすの」様の木の倒れて外側が腐れ心の部分だけ残ったもの。又抜け出すこと。

すんばい 充盈。いっぱい。
すんばい 潮が満ちこんださま。又船が満載したさま。

すんぶすんぶ 船々が皆満載してあること。

せ之部

せで。「」がある。てがある。
せー さいころ。又せい(精)。「」がなか「精がない。「」むむか「体力に不似合に。体力以上に。又貝の名。

せかせか 気をいらだてる。性急。
せかせる あわてさせる。急所をつく。せき合わせる。

せからしい さわがしい。うるさい。
せがれる せかせか思わすらう。取越し苦勞をする。 58オ

せきたくる せきたてる。せつかちに催促する。
せきたん 石炭油。石油。「」ばこ「石油缶二個入る箱。「」くわん「石油缶。

せきとばす 押しとばす。つきとばす。
せきにん 着物の腰上げ又肩上げ。

せく 後から押す。又痛む。「はらが」。 「いが」。又節句。
せーく 細工。

せーご せいご。すずきの稚魚二三寸位までのもの。五寸位までのものを「さくら」長じたものを「すずき」という。

せじ せんじ(煎汁)。かつお節やさば節などをつくるときの煮汁を炊いて飴状にした調味料。

せしないき 流しの溜り水。せせなご。
せせくる あばく。「たんぼを」田圃をあせる。つつきまわす。

混乱【58ウ】させる。かき(掬)ちらす。
せせけー 大多忙。てんでこまい。又返答につまんでどきまぎすること。

せつ 古。「」もまーらん「ろれつもまわらん。「」がかなわん「言語不明瞭なこと。

せつく ひっきりなしに催促すること。

せつせ 呼吸がせわしいこと。

せつちー 鶯の立春以前の呼び名。鶯は立春と共に「ほーほけきよ」と鳴き初めて鶯という。それ以前は「せつせつ」と鳴き「せつちー」と呼ぶ。

せつとう 石討。石工の用いる金槌。大なるを玄能ヒキといい小なるを「せつとう」又「たたき」という。

せつべ 精一ばい。

せつらしか せまくて窮屈なこと。小うるさいこと。せかせかすること。

せーてー 一昨昨日。

せと 背戸マコ。家と家とのあいだ建物と石垣などとのあいだをいう。棟桁の方向に用いる。家の前後の方には用いない。「ーえー」背戸マコ会い。背戸マコの通り。

せーとう 菜刀。野菜包丁。

せともん 瀬戸物。やきもの。

せーび せみへ。又帆柱の上端に取り付けみなおへ帆綱へを通す滑車をつけた具。桑材を用いる。落雷を避けるという。

せぶる せひる。ねだる。せがむ。

せめく 苦しげな息づかいをしてせれせれ咳をすること。

せれせれ せんく病者などの息の音。

せーろー せいろう（蒸籠）。又鯉節などを燻蒸するに用いる木框に竹を敷いた籠。

そ 之 部

そうがらしい すさまじい。仰山。又騒がらしい。さわがしい。

そうさつ そうさいへ相殺へ。

そうどう 混乱。さわぐこと。「ーくわら」そううしきさま。

そうひく ぶら下げること。引きずるようにして持つこと。強いて

連れ来ること。引つ張って連れ来ること。

そうびらい 宋美齡をもちつた語。巧みに言をこしらえ上手に他を

あざむくこと。又ヒキのヒキ人。

そえもん 添えもの。副食物。おかず。

そーくい そくいへ糊へ。間に合わせの素人の小修繕。こそくい。

そーけ ざる。

そげん そのように。「ーごだったとよ」そのようにござつたのよ。

そこまーし 底廻し。円形に挽く鋸。

そせ そして。

そそぐ すそぐ。

そそけ そげ。

そーだぐわーし 小麦粉に砂糖を和して練り指の間からドロドロ流れ出る程度にし炭酸ソーダを入れて攪拌し蒸籠に敷布を敷きその中に入れて蒸したものの。ふくれぐわし。

そつくい そつくり。

ぞつさらしい どつさらしい。ぞんざい。ふしたら。不頓着。無責任。

ぞーつと ぞつと。静かに。

ぞでした わいろ。

その ながしへ流へ。「ーけた」台所下駄。「ーはたけ」住家に近い野菜島。古昔土地固有の時代にも園島へ菜園へは私用を認められていた。

そぶい そぶりへ素振へ。

そーら 草マコ。わらでつくり物をこすり洗うに用いるもの。たわし。

そらく そりやくへ疎略へ。おろそか。そそつかしい。

そらまど 天窓。引き窓。渡辺姓の家では天窓を造作らない。古渡辺網が羅生門で切取った鬼の腕を鬼が綱の乳母に化けて来て老先短

い老いの目に一眼鬼の手というものを見たいものと哀れに申し入れたので綱もついに乳母の情にひかされて箱から取出して見せると乳母は有難く押載き「あらありかたや」と言うが否や破風から免れ去ったというので渡辺姓の家では天窓を作らないのである。

た 之 部

たい たれ(誰)。

たいげん おしやべり。

たいたんもん 胆太きもの。横着者。悪賢いもの。

たーいも 誰れも。自分も。

たいやみ たれ(労)やめ。晩酌。

たいわんたばこ だちやら。又えんけるす。とらんべつともいいう。

終戦後伝来したものでその葉がたばこに似てるから台湾煙草の名

がつき又天使のらっぱに似ているというので「えんけるす」とら

んべつと」の名がついたのである。白色の百合に似た花を年四回

位開く。

たいわんばーしょう 台湾種バナナ。短幹と中幹の二種あり果は長

大芳香あり。

たおい すみ(角)になっておるところ。又低くなっておるところ。

たかあし 足を高くあげて歩むさま。

たかせん 高勝。高さ八寸の足をつけた勝。

たかたろう 入道雲。梅雨明けの頃に海際に出る白雲。この雲が出

るようになれば梅雨もあがる。

たかてつぼう 竹の筒に紙玉をこめて突き出すもの。紙鉄砲。

たからんばーち 竹の皮笠。竹の子笠。

たかわたし 十月末頃北方から鷹が群をなして南方へ移動する。こ

の頃には風も強く天候も悪い。

たきもん たきもの。薪。

たぐる 手繰る。又輪にして束ねる。たがねる。

たけぎ たきぎ。薪。

たけきれ 竹切れ。竹の切れはし。

たげく 身もたえしてなげきかなしむ。

たけのかわ 鰻の一種。竹の皮に似たのていう。「ごまおなゝぎ」。

たけぶい 岳降い。山に雨の降るさま。里には降らずに山を雨や霧

で押し包んださま。台風が接近したときの山の模様。

たけもん 薪。

たこ さんや(棧矢)。地突き材打ちなどに用いる具。

たご 団子。「ーよかあーれー」団子よりもあーれー(まぶし粉)

に費用がかかるという意。雑費の方がかさむこと。【62ウ】又団

子と菓子との相違は概して水気が多くねばり気のあるものが「だ

ご」そうでないものが「菓子」。

たごとい 葬儀のとき墓地の入口に先き火をたくこと(庭火はたか

ない)。そして粟生では法華宗丈けが行い真宗ではこれをしない。

たーし だし。鯉節の異名。又節類いりこなどの煮汁。

たーす さより。針魚。だつ。

たたき 石を叩く具。せつとう(石討)。

だちく だんちく。飼料に肥料に又その葉は「ちのまーき」を巻く

に用いる。

たちまち 立待月。陰曆十六夜(いざよい)十七夜(たちまち)十

八夜(いまち)十九夜(ねまち)というのであるが粟生では十六

夜(いざよい)十七夜(ちよう)のうさぐい)十八夜(たちまち)

という。

だちむねー 埒もない。無責任。不手際。

たつ 竜巻き。

だつきやう らつきやう。辣韭。

だつとう ざとう。盲人。

63オ

たて 骨肥。魚肥。「やまー」獸骨肥料。

たて 腫物・痛所を湯・水又は薬液などで浸し洗うこと。又船底に火を当て船虫や貝殻などを焼きコイルタールやその他の塗料を塗ること。

だてーむねー だらしのないこと。しまつけのないこと。

だーとーより さようならの意。「だー」は脱で「去る」の意味である。すなわち「だーとーより」は「去るやより」であつて去り行く人の挨拶で留まる人のいうことではない。民俗学の宮本先生は一湊で聞いたと前置きして「鎌倉時代男は門を出れば七人の敵が居るといわれた。常に刀を脱ぐことを忘れるなという壮行の辞である」と屋久島民俗史にあるけれども之は甚だしい誤りであつて脱と抜とを混同したものである。小島の根石は辨慶が射た鏝だとか鯛の川は彦火々出耳尊が鯛を釣った所だとかいうのと同様不見識である。

たばかい たばかり。うそつき。人をあざむくこと。

63ウ

たばく 食当りなどで苦しみ吐くこと。空吐きすること。

たひろか たひろい(唯広)。ひろすぎる。

たーぶ たぶ(楯)。「まー」一センチ位の黒い突をつけ食用になるもの。「しおー」食用にならぬもの。「たぶの木」楯の木。各種の工作用に供せられる。又たも。魚などをすくいとるもの。

たぶい たぶり(唯降)。集中豪雨。

たべー たぼうこと。「ーくさらかす」たぼうて役に立たぬようになすこと。

たぼう 保存。物をかくごすること。

たま あたま。「ーがわるか」。

たまがらかす おどろかす。

たまがる たまげる。

たまさか 折角。

64オ

たまなし さまなし。弱虫。

たまらん 保ちが悪い。

たまる もちがよい。

だまん 強くない。弱い。

だめく さめく。多敷集つてさわぐ。「とびおがー」飛魚が水面近くに浮遊し浪の立ち騒ぐような音をさせてやめくこと。

たもる 食べる。

たもれ ください。又食べなさい。

たやすか やすいこと。簡易なこと。

たるむ たるむ。ゆるむ。

たーれー たらい。「ひんー」鬚たらい。顔洗い用の盥。古くは高脚のものであつた。

64ウ

だれる たるむ。又労れる。衰弱すること。又病むこと。

たんがさ らんがさ。洋傘。

たんきー 胸をたいて喜びいさむこと。

たんぐい 乱戦。船を繋ぐために川の中に立てた太い綱を結びつける杭。又陸上にも打ち立てるかし(杖舂)。

たんご 水おけ。たご。

たんどくせん かんな。

たんばら 「たんばら」とは元來物入れの箱のことをいうたものらしい。川辺郡地方の漁師が沖へ鯉釣りに行くとき漁具を入れたり煙草を入れたり且つは又枕の代用にするために用いたものが「たんばら」でありこの「たんばら」を持った漁師すなわち川辺郡方面の鯉漁師を「たんばら」というに到つた。

65オ

たんばーれー 最盛期となり乱獲する漁期。

たんぶくろ へちまの菓の熟し切ったもの。菓を採ったから。又ど
んぐろすの袋。

たんぼーらんぶ。明治初年羽生助市といういさば持ちが始めて「
らんぶ」を購うて来た。当時のものは四角形の硝子板をはめたも
の即ち「箱らんぶ」であつたが従来の行灯とは画期的な時代の先
端物であつた。その夜このらんぼーというものを見物しようと東
生の民衆がワンサと押し寄せて文明の利器に目を見張つたとのこ
とである。

たんもん 反物。太物。
ち之部

ちあめ ほんぶりの雨。にわか雨に對する語。
ちえ (手)。「ーかーぎ」手かき。「ーぐろ」ちぐろ。ちよろ
まかし。「ーのけー」手拭。「ーき」水桶の取り手。「ーしきく
わん」手におえない。

ちえば 親知らず。一番奥の齒。
ちえんま 伝馬舟。
ちかた 地方。本土のこと。島方に對していう語。じかた。
ちかづき 情人。

ちきー ちきり。はかり(秤)。大なるを「きんじょう(斤量)」。大
ー小さいものを小ー。又西瓜の巻鬚。西瓜は菓のついたところ
から三本の巻鬚が枯れば熟したときだといわれる。

ちき 不正確に結論づけるのをとがめていう語。「ーがき」相手の
誤りを強くとがめていう語。

ちきさい 實際。
ちく つく(突)。又づく。橈腕に立って早緒をかける具。橈づく。
ちくりんちよう 頭を下にして跳び込むこと。

ちげ 陸路。

ちーご こま(独樂)。
ちーしやう ついしやう。おもねり。「ーもん」ついしやうもの。
ちすい 地すり。とびのお(鰻尾)。牛車の後方に差出た地に曳き
づる材。

ちーたち ついたち(朔)。
ちちぐさ 乳にしこりが生じ熱発する病。象皮病の一種。
ちつくじい 高下駄。地をつくじるとの意。

ちーつと すーし(少)。
ちとーし 地通し。かきとおし(垣通し)。
ちない 地鳴り。

ちのまーき 粽のまーき。ちまき。「だんちく」の葉で「もち米」
を三角に包み蒸したものを。古楚の屈原が世情の汚濁をなげき遂に
「べきら」に身を投じて死んだ。屈原の妹は兄の死を大いに悲し
み湖面に祈りを捧げた。すると揚子江にすむ六尺ばかりの大鯉が
屈原の死体をくわえて来た。屈原の妹は大いに喜び丁寧に葬つた。
土地の人々は屈原の死をいたみ毎年その祥月命日には粽を「べき
ら」に投じて屈原の霊を慰めた。これが五月五日であつたので節
句としての行事にまで發達した。辞書にはちまきは「茅」でまい
たから其の名があり篠の葉などで巻くとあるけれど粽の起源は中
支那であり中支那では今日なお「たんちく」の葉に米を包み三角
形となし左右五個ずつ都合十個を粽の余りの葉先で括り合わせて
蒸しておる。これは屋久島のものとは単に「まーき」という。

ちが 女の性器。恥部。つび。ほと。
ちむねー 理もない。道理にかなわぬこと。理由のないこと。よ
こしまなこと。

ちめーのしこ 爪ほどの分量。ほんの少し。

65ウ

67オ

42

ぢやー さようか。なるほど。「ーやいなことかよ」。

ちやくつと 着と。滞りなく直ぐに。着々と。「ちやくちやくつと」。

ちやーとうはなこう 茶燈花香。朝夕の仏事供養。

ちやまつい 忌日に法要に参加すること。

ぢやうい 料理。

ちやうちやうめー 右往左往。うろたえ廻ること。又忙しく立廻ること。

ちやうせき 朝夕の食事。ごはん。

ちやうせんあさがおる ころやう(留紅草)。るころあさがおる。

ちやうちやう 蛾を蝶と混同していう。「ーばな」ぐらじおらす。67ウ

ちやうほう 裁縫。「ーじん」裁縫の上手な人。

ちやうれき 懲役。

ちよか とびん。急須。又湯わかし。

ちよくらかす からこう。ひやかす。なぶる。とりとめもないことをいうこと。

ちよーしもーた しまった。「ちよー」は強める語。

ちよつべん 天辺。一番高いところ。頂き。

ちようのー ちような(手斧)。

ちん すずき(鱸)。

ちんこ 男の性器。ちんちん(幼児のもの)。

ちんごいとせん 一寸ともあらわれない。一寸も芽をふかない。

ちんだい 鎮台。軍隊。兵士。

ちんぢん ちりぢり。みぢん。「ーばらばら」。

ちんのおなじ ちんの鱧。すこぶる大きく長さ四尺ばかり灰色をなし黒点のついたものもある。味辛煎して食べる。68ウ

ちんのご 狎。「ーぐさ」えのころぐさ。

ちんばくろう つかくろ。つかめ。又片足で飛ぶこと。又魚のあご(顎)。

ちんや かんじゃ(閑舎)。まなか、かわや便所雪隠後架はばかり手洗(ちようづ)ひとの、やんごとないところなどいう。詳しくは「かんじゃ」の案を見よ。

つ 之 却

つい フリ(釣)。いおつ(魚釣)。

ついで 不用。不用。

ついでん 越中ふんどし。

つがね 水辺に居る蟹。甲が青の幅があるもの。

つがまえる 捕える。

つがむ 何等のかわりもない。無関係な。又不都合な。心にもない。

つーく 強く打つ。たたく(痛苦)。「つーきたくれ」。
 つくい つくり。「ーごと」つくりごと。「ーいも」つくねいも。
 「ーもん」つけあげ・卵焼その他菓子等で硬蓋洲浜台等を飾るもの。「ーひょう」作り病。
 つくぢる ついはむ。つつつく、つきませる、いちめる、やそのかす、ほじくる。又かち棒で麦を突き突をおとすこと。
 づくづく づきんづきん痛むさま。
 つくぼう つくばい。うづくまる。
 つくる こしらえる。「さしみをー」。
 つーけ 強打せよ。叩け。「つーこしらかせ」叩きたくれ。
 つけあげ 澱粉に生諸のうでたものを混ぜてこね、砂糖を和し塩を少々入れて油で揚げたもの。粟生の名産である。
 つけたいひーたい 風が強く吹いて来たり(ついたり)弱くなつてこゝまでは来なくなつたり。
 つーこーせ 叩き殺せ。
 づしんづしん づしづし。
 つつ土。「ーいねー」土もっこ(釜)。
 つづ づば(唾)。
 つづい つづれ(襜褕)。綴り衣。
 つづかん 続かない。がまんができない。耐えられない。
 つづく 痛む。疼く。
 つづく 耐え忍ぶこと。がまんすること。
 づくづく づくづく痛むさま。
 づつなか 術なか。堪えがたいこと。やり切れないこと、忍びがたいこと。
 つっぱい 突張り。つつかい(突支)。
 つづまき つむじまき。つむじ風になつて巻くこと。

70オ

69ウ

つとめ 正座。又「おー」勤行。
 つなで ついで。
 つぶし 膝小僧。「ーん」つぶし。
 つぼる 端折る。
 つまーし 津廻し。廻航。昔は陸路の交通が不便で物資の運搬などよく海路によつた。津廻しである。
 つましか つましい(約)。
 つまど 家の裏側の方。
 つまむ つねる。又按摩すること。
 つまらん つまらない。又大変なこと。何とも仕様のないこと。
 つめ 胃や腸やその他内臓が疼痛をおこす。「いがーる」胃が痛む。「ーこーす」胃や腸がつめてひどいこと又そのために死ぬること。又ひどく凍えること。凍え死ぬること。
 つめたち つまたち(爪立)。
 つらかす ちらす(散)。
 つらし 辛し。「ーか」心苦しい、気の毒。「ーい」心外な。「ーまア」。又取るに足りないこと。軽べつした話。
 つらす 散らす。
 つらばーぢむわな 面恥もない。無遠慮な。心臓の強い。
 つらもん 強者。つわもの。
 つらんかわ 面の皮。「ーをはぐ」恥を与える。「ーのあつか」厚顔。
 つる ひきつる。痙攣を起すこと。てんかんの発作すること。「顔がー」。「ロがー」。又つるばし。
 つるつと まどろむさま。「ーともせん」まんじりともせん。又つるりと。
 つるべ いど。船で水を汲み上げる小おけ。

70ウ

つれぶし 引きづられて同調すること。

つわ つわぶき。

つん つんぼ。

つんとして つんとして、すまして。

つんのはし つるばし。

つんまめ かつむり。

了之部

了 術。わざ。策畧。

了ー 底魚を釣るとき曾根をはずさぬよう船をこぐこと。又といへ
樋)。「ーのこう」樋をかけた川。

了ー 分量。「ーがある」。

了ー 或る語に添えて強くいう語。「ーはかもんが」。又だい(大

了ー)。「ーなこと」大切なこと。又台。又代。

了ーいた 手板。物品の送荷台帳。立木台帳木材台帳など。 72オ

了ーおさめ 「了ー」は連名弔い即ち年忌弔いである。一周忌三年

忌七年忌十三年忌十七年忌二十五年忌三十三年忌をセ了ーめいと

いう。三十三年忌が弔いおさめである。

了ーく 大工。

了ーご ひく。

了ーざお 手竿。手で突き張ること。

了ーしし といし(砥石)。

了ーしなもん 大事なもの。

了ーじまい 仕事を一応打ち切ること。

了ーしや 術者。技術の修練された人。

了ーしよく 手燭。ことほし。裸のがんどう。

了ーすじ 仕事の天分。「ーがよか」。

了ーいた 出し板。船の軸に(右舷)屋号を印した板。

了ーづえ 手強い。

了ーつかい 鉄の籠。

了ーづま やまかし。ごまかし。不正。

了ーぬき 手袋。

了ーのうち 得意な術策。

了ーのげえ てぬぐい。

了ーのこう 樋の河。とい(樋)ひ又は「ひ」をかけた川。

了ーのもん おてのもの。

了ーでは 出端。軒。

了ーではい 出張り。遊興その他多人敷ある所へ着飾って行くこと。

了ーではこ 裁縫箱。

了ーではた 糸車。

了ーではらき 小魚を手で裂くこと。さきなます。 裂

了ーではぶち 船の上縁りから張り出した波よけの葺。 葺

了ーではまぜ 餅をつくとき手水をすること。手を以て餅を返して万遍な

くつけるようにすること。

了ーではまーつ たいまつ。

了ーではもと 著。

了ーではようじよう 手養生。素人治療。

了ーではよき 小さいよき(小斧)。

了ーではいら たいら。畠地や原野山地などの平地になつてあるところ。

了ーではわうたせん 最初から決定づけてあること。無条件で決定するこ

と。

了ーではんごうもん 癡狂人。いたづら者。手に負えない悪さをするもの。

了ーではんで 天で。初めから。「ーうてあわん」。

了ーではんちく 天目茶碗。大きく高いもの(はなうち)を天目といい又

71ウ

72ウ

茶々碗全体を天目という□がある。栗生では前者をいう。73ウ
てーんなこと 大事なこと。

と之部

どろ・槽。「」をおす。ろをおす。

とあかね 唐あかね。花色木綿。

とい とり(取)。とりぎ。取り木。

とーいかーじ とりかじ。又取りこむこと。欲深い者。

とーいがりけ 通りがかりに。行きすりに。

といさかな 取り肴。碗蓋に盛り客に箸で取って与える肴。

といじい 鳥の尻。ひたれ。鳥の尾の肉。あぶらじり。又餅のちぎ
り残り。

といつむる 取り詰むる。とりひしぐ。

とーいどーい とりどり。種々雑多。

どーいどーい ざろざろ群がり通るさま。

といはらだつ 鳥肌だつ。さむけたつ。又取りばらだつ。飛魚とり

などでげんがよく調子に乗ったさま。

といぼ とび魚。飛魚が初めて屋久島で漁るようになったのは天明

三年(一七八三)四月八日と伝えられる。それ以前は毒魚として

捕食しなかつた。江戸時代の初期頃から阿波の漁船が栗生を基地

として出稼ぎに来ていて宝永五年(一七〇八)ローマの宣教師シ

ドーテが浦崎に上陸したときにも阿波の船が来ていたので或は阿

波の漁師達の指導によるものかとも思われる。【以下「：乱れた

」まで別紙後貼】とび魚は初め鯉の餌と平網でとっていたが後

に改良された。船も最初は鯉の餌漁りと同様鯉船とその伝馬船と

で乗組員も鯉組と一致していた。漁法が進むにつれ船数を増す必

要に迫られ鯉船組を分配してとび魚組が出来遂に一鯉組に三つの

とび魚組が出来て「古網」「中網」「□網」と名づけたこの三十

三張りの外に小型の鯉組□とび魚組が出来これを「ちようほうま
る」(重宝丸)と呼んだが大正頃から段々この組織が乱れた。

といも 唐蓆。「やき」焼蓆。屋久島蓆は伝来の年代不詳なるも

恐らく遣唐使の船に屋久島人が乗船してきて南支方面から持って

来たものではないか。随分古くから屋久島人の常食であり琉球蓆

は元禄初頭の頃屋久島の交易船が直接琉球から持って来たもので

ある。

といもーい 何々ぐらい。何々うえした。何々せんご。「十キロ

」十キロ位。「千円」千円前後。

といもーる 取りすがって進むこと。

とういと 唐糸。麻糸。

とうさんぼう とうせんぼう。

とうし 桐油紙。「合羽」桐油紙で作った合羽。又うやつき「と

うす」。

どうしい ぞうすい(雑炊)。「ななくさ」七草がゆ。五月七日

の節会に供える粥。又菜飯。野菜肉など入れた炊いた水気の多い

飯。

とうじん 小便垂れ。支那人は寢室に便器をおいてあるので座敷や

寢床などで小便を垂れる者をおぎけて「」という。

どうないこうない どうにかこうにか。

どうひよう 土俵。又げっぶ。

どうぶーりー 胴震い。

とうめえ 燈明。又唐米。外米。「ぶくろ」外米の入った袋。ド

ンケロス袋。たんぶくろ。

どうらくもん 貞操観念のうすい人。

どうらん 【以下、この項、別紙後貼】どうらん 胴乱。革製の下

げ鞆。「ぶね」昔栗生の羽生助市という者まことに器用で立派

な細工人でもあり又企業的才能も優れた人であり、「いさば」持ちで鹿兒島交易に従事して常に粟生川の護岸工事を計画しその実行方を村役に進言したりしていた。明治初年石油洋燈第一号を鹿兒島から買つて来たときにはその洋燈を見物しようと村中の人々が謂集したと伝えられる。その助市が重要書類を携行するために常に下げ鞆を携えていたのでその持ち主の助市を「どうらん」と呼びその持ち船を「どうらんぶね」と呼ぶようになった。粟生には明治以前から鰹漁船が十一隻あつた。即ち川上の方からじんのくぶね(甚六船)いねぶね(岩^{いね}船)しんちや(新しく出来た船組の意新茶)こまどい船(駒八を「こま島」にかけた呼称)ともじろう船(友次郎船)じゅうたぶね(十太船)せんさくぶね(善作船)どうらんぶね(助市船)よはぶね(与八船)けいすけぶね(慶助船)の各船名はその持主の有名な名を取つたものである。とえーかまひ。鴨居の高さは普通五尺七寸五分八寸とする。とかげ 斗掻け。とかき(槩)。

どかつと どかつと。カつきて坐ること。 75才

とき 齋。法会などの折りの飯。おとき。

ときーね もちぎね。マギね。中ほよく両端太く長い杵。

とぐ 米を洗うこと。

どく ろく。「ーなもん」ろくなもの。

どぐい ろぐい。ろべぎ。

どくしやう ろくしやう。緑青。

とくじらーみ つぶじらみ(陰蝨)。陰部に発生するもじらみ。つびらみ。

どくてー ろくたい(鹿胎)。しかの胎兒。

どくび ろくび。負子。

どぐろ 土色のような黒さ。どすぐろ。

とこ 檯床。船の舵をかける所。又整地。「ーをする」。

とこづめ とこすれ。

とこむし 床虫。南京虫。

ところ 部落全体。「ーんもん」所のもの。部落のもの。又「ーじゅう」所中。諸々方々。

どーさむねー 造作もない。

としげーむな 年甲斐もない。

としのばん 年の晩。年越しの晩。大晦日。

とーす いつわる。又とおし(徒)。又寝小便をすること。

とだま ふとしたこと。悪いもよらぬこと。「ーなけが」。

とたん 垂鉛板。「ーたんご」はけつ。

どっかい 土下位。尻をついて坐すること。「ー比すわる」。

とっかけ とかけ。

どつきやう 弩弓。竹の漢に弾を乗せはじき竹で打ち出す器具のもの。

とっくい 徳利。

どっさい 重いものをどさりとおくこと。

どっさらしい 不正直なこと。だらしないこと。ぞっさらしい。

どっしん どしん。強く突き当ること。又重いものを落したときの音。

とったいやったい 取つたり遣つたり。とりやり。又贈答。 76才

どったどった どつたりと倒れるさま。又行動の活発でないさま。

どっちみち どのみち。何れにしても。

どつとべー 行動の活発でないもの。

どぶどぶ どぶどぶ。

どっぽーじん ばった(飛蝗)。

とと ちち(父)。

とどろ 支え木。杭木。

とはーごと 途方もないこと。愚にもつかないたわごと。空言。

とばごと うわごと。

76ウ

とばし 飛ばし。とばちり。しぶき。

とばしこむ 水に飛び込む。

どは 土羽、羽口。「うち」羽口を堅めること。「しば」羽口しば。

どひのい とひのり。尋常の乗組員でなく臨時に乗り組んで漁に行くこと。

とひら とべら。

とぶくら とぶくろ（戸袋）。

とほうむねー 途方もない。途轍もない。

とぼけた 馬鹿げた。とんでもない。

とーめー 唐米、外米。「ぶくろ」どんぐろす袋。

77オ

ともん ともの（利物）。刃もの。

どやみ じよやみ（序病）。発病前のわるさ。

どよめく さわぐ。どろめく。

どれーん どんより。「ー」となった。風が止んで無風状態になった。

「ーがいった」気抜けしたようになった。

どろい 鈍い。しまり気のない、愚なもの。

どろか 鈍か、ぐどん。「とれーもんかまー」どろかもんかまー何

て悪かなものかなー。

どろめき どよめき。鳴動。

どわすれ どうわすれ。

とんぐわ 唐鍬。山ぐわ。

77ウ

とんこつ 竹又は木で作った煙草入れ。「竹ー」。箱ー」。箱と

んこつは中を二段又は三段とし下段煙草上段釣道具などを入れ且つ枕にもなるもの。たんばらともいう。又獸類の両性を有するもの。人間で両性をもつものを「はにわり（半月）」という。「わり」は朝鮮音「月」。

とんぢやくむなか 頓着がなか。「とんぢやくむねー」頓着がない。

どんぶい どんぶりに料理物を入れたもの。つけあげ・みかん等を

つき合わせる。どんぶりもの。

どんぶどんぶ どぶどぶ。

とんべとんべ 気のすわらない者。心の動揺して定まらないもの。

魂の足らぬもの。

とんぼ 唐藪。「やきー」焼藪。琉球藪の伝来は元禄初年で栖林公

に十年も先だつもの。大島藪は嘉永元年（一八四八）友次郎船が

大島から伝来したもの。屋久島の藪は随分古くからあって屋久島

人の常食となっていた。

どーんどや どんど、さぎっちよう。鬼火たき。正月七日青竹を束

径三十センチ長さ十米位に束ねその上に更に四米位の青竹を枝付

きのまま立てこれに鬼面（一米×二米）むかで（ハ〇センチ×二

米）の絵を付けこの竹束を三本の径二十センチ位の松の杭（一米

位地に埋り込む）に結び付ける。各戸から集めたかざーし（門松

の根メ）や「はまかし」の生枝を山と積んで点火し「どーんとや

さぎっちようや鬼の面焼きわった」と嘯し立て即製の竹弓などで

射かける。燃え残りの「かざーし」を持ち帰り十五日のち炊き

に用い「はまかし」の小枝を夜の門祝の折りに爆竹代りにする。

— 鹿児島大学教養部助教 —